

「生きがい」とは？

募集要項

【募集内容】

裏面の文章を読んで、「生きがい」についてあなたが考えたことをエッセーにしてください。英語の場合は400words程度、日本語の場合は1,200字程度で記述してください。

【応募資格】

高校生(国籍・学年・性別・居住地は問いません)。

【応募方法】

所定のGoogleフォームにエッセーを記載して応募してください。(郵送・持ち込み不可)。

Googleフォーム

<https://qr.paps.jp/HSLpz>



※Googleフォームは下書き保存ができません。Wordファイル等に下書きを作成してから所定のGoogleフォームにコピー・アンド・ペーストしてください。

【募集期間】

2021年8月2日(月)~9月6日(月)9:00受付締め切り

【表彰】

最優秀賞1名(賞状及び副賞5万円を贈呈)
優秀賞若干名(賞状及び副賞1万円を贈呈)
最優秀作品は、10月10日(日)津田塾大学において表彰し、津田塾大学広報誌「Tsuda Today」と津田塾大学ウェブサイトに掲載・公表します。優秀作品は津田塾大学ウェブサイトに掲載・公表します。また、入賞者には10月8日(金)までに本人に通知します。なお、応募作品の著作権はすべて津田塾大学に帰属します。新型コロナウイルス感染拡大状況に鑑み、表彰をオンラインで実施する場合があります。

【問い合わせ】

津田塾大学ライティングセンター 高校生エッセー・コンテスト事務局
TEL:042-342-5129 E-mail:essaycon@tsuda.ac.jp

<https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/essay/index.html>

逆境を光につないだ 神谷美恵子の言葉から

津田塾大学は、津田梅子の「女子英学塾」創設から120年にわたり、「変革を担う」女性たちを輩出してきました。精神科医として、ハンセン病の逆境にある人たちに寄り添い続けた神谷美恵子(1914-1979)もその一人です。著書『生きがいについて』(みすず書房)は、出版から半世紀以上たった今も人々の心をとらえ続け、コロナ禍で再びその意義が見直されています。

今回のエッセー・コンテストでは、神谷美恵子が残した言葉を手がかりに、高校生のみなさんに「生きがい」について考えたことをエッセーという形で書いていただきます。

個人情報は、本コンテストの目的以外には使用いたしません。
<https://www.tsuda.ac.jp/privacypolicy.html>



「生きがい」とは？

神谷美恵子は津田英学塾(現津田塾大学)で英文学を専攻しましたが、卒業後まもなく肺結核にかかり、孤独な療養生活を通して人生への思索を深めました。

「当時は結核のいい療法もなかったので、同時代に療養していた知人のなかには、いくたりも若くして逝いたひとがあった。その後私はふしぎにも完全に治ったが、いったいなぜ私だけが癒されて、あのひとたちは死んで行ったのであろうか、という思いが負い目のようになって、いつまでも心につきまತ್ತった。大体以上のようなことから、病や苦しみ、死や生の問題は早くから私をとらえてはなさなかった、といえる。

らい(原文ママ:ハンセン病)の存在をはじめて知ったのは、津田英学塾二年生のときであった。キリスト教の伝道者であった叔父にさそわれて東京都の多磨全生園をおとずれ、この病気の患者さんたちに初めて接して大きなショックをうけた。私もできれば看護婦か医師になってこのひとたちのために働きたい、という思いが心に芽ばえたのもこの時である。しかし、周囲の大反対と自らの病気のため、この願いはなかなか実現されなかった。」

(『生きがいについて』より)

精神科医として歩み始めたのは30歳になってからのことでした。2人の子どもを育てながら、当時、差別や偏見の対象であったハンセン病の人たちに寄り添い、多くの翻訳や著作を世に送った神谷美恵子は、まさに「生きがい」をたえず自らに問いながら歩み続けた、変革を担う女性であったと言えるでしょう。

神谷美恵子が全霊をこめたエッセー『生きがいについて』の冒頭には、こう記されています。

「平穩無事なくらしにめぐまれている者にとっては思い浮かべることさえむつかしいかも知れないが、世のなかには、毎朝目がさめるとその目ざめるということがおそろしくてたまらないひとがあちこちにいる。ああ今日もまた一日を生きて行かなければならないのだという考えに打ちのめされ、起き出す力も出て来ないひとたちである。耐えがたい苦しみや悲しみ、身の切られるような孤独とさびしさ、はてしもない虚無と倦怠。そうしたもののなかで、どうして生きて行かなければならないのだろうか、なんのために、と彼らはいくたびも自問せずにいられない。たとえば治りにくい病気にかかっているひと、最愛の者をうしなったひと、自分のすべてを賭けた仕事や理想に挫折したひと、罪を犯した自分をもてあましてるひと、ひとり人生の裏通りを歩いているようなひとなど。

いったい私たちの毎日の生活を生きるかいあるように感じさせているものは何であろうか。ひとたび生きがいをうしなったら、どんなふうにしてまた新しい生きがいを見いだすのだろうか。」

神谷美恵子は、「耐えがたい苦しみや悲しみ、身の切られるような孤独とさびしさ、はてしもない虚無と倦怠」というような、いわば逆境の中から、「生きがい」という言葉を見つめなおしています。これは、「病めるひとたちの問題は人間みんなの問題」だと考え、「このひとたちひとりひとりとともに、たえずあらたに光を求めつづける」一貫した姿勢によるものでしょう。逆境から光への道しるべが、そこから見えてきます。

精神医学の英語論文では、神谷は究極の逆境を“limit-situation”(限界状況)という専門的な視点から考察しています。

Among various situations that may confront human beings during the courses of their lives, there are certain extreme adversities that by their very nature cannot be avoided, manipulated or changed; they stand in front of man like stern walls, deaf to all entreaties or endeavours, so that man's powers of endurance are tried to the limit and usually to no avail. (中略) How does a man, who is placed in such a limit-situation, react to it and in what form does he surmount it, if he ever does? That is a basic question related to his very existence as a man. (“The Existence of a Man Placed in a Limit-situation,” *Confin. psychiat.* 6, 1963.)

今、わたしたちは、世界を不安の渦に巻き込んだ新型コロナウイルス感染症拡大の現実に向き合っています。コロナ禍で世界が大きく変わるなか、地球上の多くの人々が、これまでとは全く違う、厳しい状況下に置かれました。命や健康、経済が脅かされ、人と人のつながりや、行き来も厳しく制限されました。みなさんのなかには、不自由を我慢したり、孤独におしつぶされそうになったり、また、楽しみにしていた旅や学びの機会、そして夢まで諦めなくてはならない人もいるでしょう。そのようななかで、自分の生き方や考え方、「生きがい」を見つめ直しているかもしれません。

そびえたつ壁のように立ちはだかる困難を、人はどう乗り越え、自身の存在意義を見出せるのでしょうか。自分自身の経験や学びなどをもとに、あなたが考えることを自由に書いてみてください。英語でも日本語でもかまいません。

